

## モンゴル外交私記―北東アジアの中の日本とモンゴル（連載第5回）

元在モンゴル日本国大使

元 NEANET 会長

花田 麿公

### 4. 中ソ対立の中のモンゴルと私（2）

ウネン紙によりモンゴルの政治情勢と中ソ対立の中のモンゴルの動向を分析している時、1962年、63年、64年と3年連続でモンゴル人民革命党の政府要人が粛清されました。中ソ対立の深まるなかでの現象なのでこれと何らかの関係があるだろうと私は思いました。そこで月報、年報には注意深くモンゴル紙記事を取捨して編集掲載しました。ちなみにバトバヤル氏らモンゴル史家は、トムルオチルとツェンデの粛清をツェデンバルの権力闘争によるものだとしています。中ソ対立と関係ないか史料に基づきさらなる検討が必要であろうと思います。

モンゴル人民革命党の第14回党大会に基づく第1回目の党中央委員会総会が1961年7月に開かれましたが、この時ツェデンバルが第一書記に選出され、ツェンデが第二書記に選出されました。通常第二書記はおかれませんが、あえて第二書記がおかれたのは、ツェデンバルの地位を脅かすものであったと言えましょう。

翌年（1962）の年明けの1月に第2回の党中央委員会総会が開催され、ツェデンバル第一書記よりソ連共産党第22回大会の結果についての報告とモンゴル人民革命党のそれに伴う課題が報告されました。と言う事はこの時点で人民革命党はソ連を支持することを示唆していると言えましょう。その中で個人崇拝に対する批判と思想工作の積極化が述べられていますが、これはソ連共産党のラインに沿っていると当時見られました。モンゴルではそれまでチョイバルサン元帥が崇拝されておりましたが、その名称を冠した工業コンビナート、国立大学から名称が外されました。これはソ連の個人崇拝批判のラインに沿うものでした。

ついで9月に行われた第3回党中央委員会総会でトムルオチル党政治局員が粛清されました。1962年はチンギスハーン生誕800年に当り、記念切手など作成してすでに地方にまで配布され発売をまっばかりになっていましたし、大々的に祝賀行事を行なおうとしておりました。チンギスハーンはモンゴルにおいては英雄であります。ソ連にとっては侵略者です。明らかにソ連からモンゴル政府に横槍が入ったため、これは中止になりました。以後モンゴルにおいてはチンギスハーンはタブー扱いされました。これはソ連崩壊まで続きました。80年代に国立博物館を参観した際、老人が孫を連れていて、展示されている古武士を示して、この人は世界一大きい帝国を築いた人でモンゴルのバートル（英雄）ですと説明しているのを目撃しました。トムルオチルはすべての責任を一身に背負わされ、800年祭を行おうとした、科学アカデミー歴史部門に重大な影響を及ぼした、個人崇拝批判に反対だった、民族主義者であるとされて中央政府を去っていきました。

年が明けて、1963年1月早々、イリーチェフソ連共産党書記らが乗り込んできて、イデオロギー活動家会議が開かれ、ソ連のキューバ危機回避を賞賛し、中国共産党の代理として発言しているアルバニア共産党を非難しました。これにより中ソ論争においてはモンゴルがはっきりソ連支持に回ったことが判明しました。そして同年12月に開催された第5回党中央委員会総会でツェンデ第二書記が粛清されました。理由として挙げられたのが、立身出世主義、新旧世代の離間を図った、民族主義的傾向などでありました。これらの理由を見ますとツェデンバル第一書記がツェンデ第二書記の台頭を恐れたということがわかります。バトバヤル氏らは権力闘争説を述べています。

しかし、当時民族主義者と言うのは中国派を意味しておりました。文学者にダムディンスレンさんという方がおりましたが、彼は言語学者でもありました。私がお目にかかったとき香港に勤務した事を申しあげたら、香港には「ハムバラン」という言葉があるでしょう。これはモンゴル語のハムラン（全部）の意味で、チンギス・ハーン時代、香港に攻め入り、敵を海に追い落とし香港を占領したときにモンゴル語が使われた名残ですと説明されました。自動車のモンゴル語訳を決める時にマシンと言うロシア語で良いと言う意見と昔からモンゴル語にある車と言う意味のテレグを使うと良いと言う人もいました。ダムディンスレン先生は中国語のチーチェがいいと言って、中国を支持する民族派と批判を受け最後は外部には全く消息がでなくなり、静かに過ごされておりました。民族派イコール中国支持のような雰囲気がありました。

64年になりますと、12月に党の第6回中央委員会総会で、ローホーズ、ニャムブー、スルマージャブら3名の元中央委員が、党総路線に反対する反党グループで、分裂行動を行った民族主義者として粛正されました。翌年モンゴルを訪問したとき、彼らははっきりした中国派であったと説明する人がいました。

以後モンゴル社会はソ連一辺倒になって行かざるを得なかったわけですが、一国にのみよりかかると、その顔色をうかがい、社会がゆがみ、付度社会になり、全く唇寒しの状態になるようです。最近日本も付度がはやり、住みづらく、重い空気になってきており、心配です。

63年1月のモンゴルの態度決定に対して、同年3月22日付けの「人民日報」は「反論するつもりはないが、その権利は留保する」とのコメントを付してツェデンバル演説を掲載しました。中国はモンゴルがソ連側についたことを観念したようです。

その後すぐ3月30日ソ連共産党中央委員会が「党組織および全共産主義者に対する公開状」を送り、中ソ論争が開始されました。中ソ両党会談を呼びかけても中国側がなかなか応じないイライラが文章から感じられます。その中で国際共産主義運動を進めるうえで取り組むべき課題が説明され、5つの議題に触れました。彼らの観点からする人類共通の問題や国際共産主義運動の強化について提案されています。

これに対して中国共産党は6月14日「国際共産主義運動の総路線についての提案」をソ連党の書簡とともに発表しました。いよいよ論争の火蓋が切られたわけです。以後中国は一評から九評（1964年7月）までソ連共産党を批判していったわけです。当時の細かいことは忘れましたが、北京放送を録音したものを聞いたり、パンフを求めたりして9編の論評を勉強しました。

さて、63年7月14日付けのロシア党の公開書簡が同19日にウネン紙に掲載されました。この記事によって私は社会主義国世界のテクニカル・タームのモンゴル語表現を覚えました。そして翌日ウネン紙は中国共産党の総路線についての論文を7月20日にソ連紙プラウダからの翻訳で掲載しました。この時からモンゴルは中国共産党の指導幹部を名指しで批判するようになりました。私は当時ウランバートルの中国大使館も参加するモンゴルのナショナル・デーであるナーダムが7月11日から13日まで行われたので、それを過ぎてから発表したのだなと思いました。そのような配慮はモンゴルの深いところの気持ちと理解しました。しかし、表ではソ連に忠誠を尽くすことになり、以後モンゴルの中国批判は激しさを加え、ソ連共産党に先立って12月の中央委員会総会で中国共産党の非難決議を行いました。ちなみにソ連共産党の非難決議は翌年の2月でした。この論争の過程で、モンゴルの党が中ソの仲介役をしたけれども成功しなかったと言う事実が明らかになりました。

このような論争は国家間の関係にも影響し、63年の後半にはモンゴル経由北京モスクワ間の国際鉄道の列車本数が激減しました。これにより中国とソ連東欧間の貿易は減少し通過貨物手数料を収入源としていたモンゴルも外貨不足を招きました。同年9月23日よりモンゴルに来ていた中国の援助労働者が引き上げを開始しました。ピーク時には1万2,000人いた（常時1万人いることが合意されていました）と言われる中国人労働者は6,000人に減少してしまいました。さらに、64年4月から7月の間にこれらの労働者のほとんどが帰国してしまいました。残ったのはモンゴル政府と労働者個人とで直接契約した500人となったわけです。モンゴル人労働者の間で中国人労働者が宣伝パンフや刊行物を配るのでモンゴル側が引き上げを要求したというのが真相のようです。

63年の12月には険悪な雰囲気の中でウランバートルにある中国大使館の飾り窓が壊されるという事件が発生しました。反中感情が一般民衆にまで拡大したものとみられます。64年になりますと、3月に両国民間の街頭での乱闘事件が発生しました。2名の中国人が拘留され、6,000人の労働者が釈放要求してストすると脅しをかけました。そこで前述の通り労働者の帰国となったわけです。

このようなとき7月に両国定例の自転車競技会がウランバートルで行われました。モンゴル側の主張では中国選手が先行して路上に釘をまいたり、自転車をぶついたりコース妨害をしたとして抗議したのに始まり、中国人労働者とモンゴル人の間で大喧嘩が起こり、3人のモンゴル人民警が中国大使館に拉致されるという事件が発生しました。両国民の感情がピークに達したときといえます。

65年8月私が初めてモンゴルを訪問した時、モンゴル側案内者がウランバートル鉄道駅で、若干血液で汚れたあとが認められた地点を指し、去年ここで中国人によってモンゴル人学生が刺し殺されたと言っていました。このようないろいろな事件が起こって両国関係は悪化しましたが、64年後半から国家関係については徐々に回復を始めました。そして中国の援助も契約の残りについて再開されました。

モンゴル担当になって最初の2年間は中ソ対立のなかのモンゴルの動きのフォローに追われ激動の年でした。公開情報一本槍でかなりのところまで情勢分析ができるという貴重な経験も得ました。当時自作した分厚いウネン紙の記事の目次集成は今も私の貴重なインデックスであり宝となっております。

中ソ対立の結果発生した現象について触れますと、1980年にウランバートルに勤務した時貴重な経験をしました。ソ連及び東欧諸国、アフガニスタン、ベトナム、ラオスなど社会主義国の大使館がモンゴルにおける主要な大使館ですが、その他にインド、イギリス、中国、日本が大使館をおいでしていました。インドはソ連とともに行動することが多くありました。残るはイギリス、中国、日本です。この3ヶ国はよく合同でパーティーをしておりました。社会主義国の中国大使が「我々西側」と言ってみたり、ゴーゴーダンスを踊ってみたり誠に普段見られない現象が起きました。しかし、現代になってみればやはり中国と日本はこのような関係が正常なのであろうと私は確信を持って言えます。おかげで中国大使館のモンゴル担当官は、日本外務省における同僚と同様ここからの親しい仲間となりました。特に黄家驊さんご夫妻は広州の方で、広東語を話され、私の妻が香港勤務のとき広東語を少々覚えたので親しくなりました。その後の3回のモンゴル勤務でいつもご一緒しました。最後には大使で同僚となり、韓国の崔大使と3家族とても親しく交際させて頂きました。忘れられない思い出です。中国の優秀なモンゴル担当外交官馬さんが若くして亡くなられたのには心が痛みました。4月5日の清明節にウランバートルの彼の墓前にお参りさせていただいたら、当たり前ですけど大使館の方が見えていました。人間の営みは主義主張、国家を超えて普通にあるもので、私の目の前にいる方々が私にとってとても大事な方々であるという当たり前のことを実感し、肝に銘じました。